

「やんちや少年発掘記」



白男川 孝仁

その1 「その日を迎えた」

今日は昭和41年4月1日である。

出水中学校社会部は、この春休みの期間中に出水高等学校の池水寛治先生の指導の下、高校生のお兄さん、お姉さん方と一緒に、第一回上場遺跡発掘に参加させて頂く事となった。本蔵久三先生のご引率の下、社会部員達は朝8時出発のバスで上場高原に向かうが、何とバスは大川内の先の青椎止まりなので、残り数キロの山道を発掘道具類を背負って歩まねばならない。

部員は、二年生になったばかりのT君と、

国分研二君、一年生は先達一男君、窪敬三君、齊藤誠君と記録にはあるが、確かに安田悟君も居た筈である。

辛い行程の筈だが、全員ワクワク感が先に出て、山の湧き水など飲みながら昼前に上場小学校に到着した。

今日から10日間宿泊させて頂く所である。

T君は小学四年生の時にこの校舎で林間学校を経験していたので、懐かしくもあった。

校舎から県道を挟んでグラウンドがあり、その先の林が発掘予定地だと説明を受けた。

そもそもT君が部長となったいきさつが変だったので説明をしておこう。

出水小学校に「出水貝塚」の展示があり、4千年前の土器や石器に興味があったので、中学生になって貝塚の近くを見学に行ったら偶然に磨製の石斧を見つけた。

社会部室を訪ねたら、本蔵先生がおられ、

「そんなもん、そこに置いとけ！」「お前は今から部長だ。数日後の生徒会総会で、発掘予算を獲得して来い！」と言われ驚いた。

生徒会総会では、予算を削られた野球部やテニス部の連中から社会部の巨額請求に対し猛反発を受けたが、無事承諾を得る事が出来た。後で分かった事だが、先生方の間では先に決まっていたようであった。

その2 「さあ、発掘だ」

発掘の方法は、現場に2m×2mの枡を縦に数個、横に数個設置して、トレンチと呼ばれるそのひと枡を2・3名ずつで掘り下げてゆくのだ。池水先生の指導のもと、全体を測量しながらの作業がいよいよ始まった。

T君のトレンチは、高校一年生で入部したての土屋タカ子さんと、名前は忘れたが大人しい感じの二年生の女生徒だった。

僕らが発掘中に考えている事は唯一つ、で

かい黒曜石こくようせきの槍などを見つけて、拍手喝采を浴びる事だった。

実はこのレコード大賞みたいな御幸運に預る方こそ、この土屋タカ子さんであるが、後述する事とする。

初日の作業は、草の根に被われた表層を剥ぐ事だが、遺物が見つかっても年代推定も出来ない採集物なので気楽なものだが、力の要る作業でもあった。

それでも表層の下から、縄文前期の「塞さいノ神かみ式土器」が発見され始めたが、まだ黒曜石の石器等の発見は、第二層、第三層の掘り下げを待たねばならなかった。

初日の夕方五時の作業終了の合図があるとT君と国分研二君は、さっさと学校に戻り、一番風呂を楽しんだがなんと最終日まで続けた。用務員のおじさんに、「もつと湯を沸かして！」だの、歌を唄って採点を求めるなど迷

惑をかけていたみたいだ。

早い湯上がりで、ビールでも飲みたいT君だったが、ビールを売ってる店など無い。近くの雑貨屋に行き、埃をかぶったウイスキーのミニチュア瓶を安くで買って来た。

国分研二君と高校一年の牛ノ浜修さんに声をかけて、給食室で夕食の準備を始めているお姉さん方の横で酒盛りを始めた。

流石にお姉さん達の通報で、先生方や部長達にお咎めを受け、宴会は即中止、主謀者と誤解された牛ノ浜さんは、厳しいお叱りを受けられ、申し訳なかった。

その3 「レコード大賞」

昨日、表層を剥ぎ終えて、二層目の関東ローム層という赤茶けたサラサラな層を掘り込み、三層目の黒色有機層へ掘り下げていた頃であった。

二層目の上部から、縄文早期の押型文土器

が発見され始めたので、T君は自分の靴底の型をコッソリ土で固めて、「土屋さん！この土器を先生に見せて来て下さい！」などと悪さをするのであった。

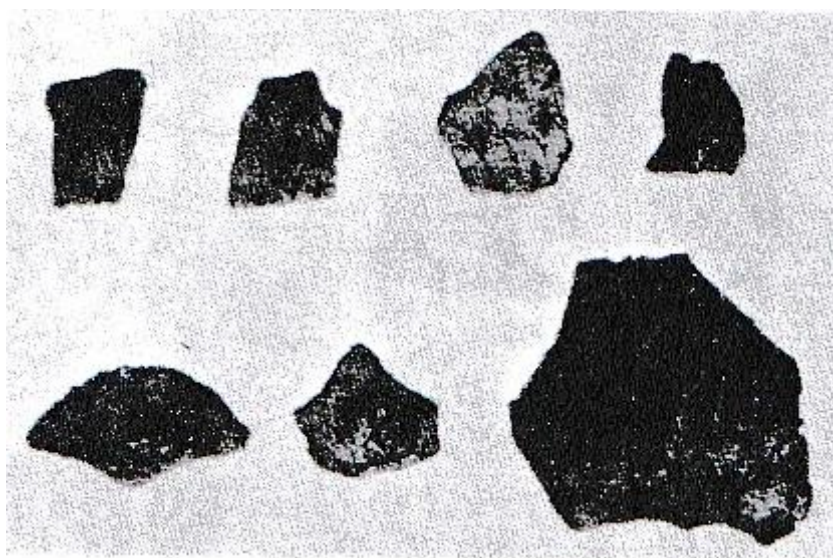
この層からの遺物の出土も多く、黒曜石の石族せきぞくや細石刃さいせきじんという縄文以前の旧石器も出始めていた頃だった。

土屋さんから『これは土器でしょうか？』と渡された土器片を受け取ったT君は、しげしげと眺め土器片の右肩をポキリと折ってから、「今度こそ先生に見せに行つて下さい」と、したり顔で指示したのであったが、それからが大騒動！ NHK、MBC、南日本新聞社まで来る始末となった。

縄文時代最古の「爪方文土器つまがたど」との事で、令和の現代でも、上場遺跡の発掘資料の第一級品として、関係書類に写真付きで掲載されている。



上場遺跡の発掘トレンチ



爪形文土器（上段2層下部・下段3層上部）

今や半世紀以上の時が経ち、T君のポキリの悪さもお許し頂けようが、大賞受賞のご目覚めない土屋タカ子さんは、その後同学年でハンサム王子様の宮川公認会計士の奥様として、鹿児島市でご健在と伺った。

今更ながら、この「ヤンチャ少年発掘記」を御贈呈してお詫び申し上げます。

上場遺跡の発掘はその後昭和49年8月の第五次発掘まで続いたが、池水寛治先生も昭和55年に早世され、旧石器時代の稀なる住居跡の発見も立証されぬまま今を迎えている事だけが悔まれてならない。

私達中学生をご指導、ご引率して下さいました本蔵久三先生は、鹿児島県考古学会の副会長を歴任され、卒寿を超えても研究を続けていらつしやるお姿は、我々の誇りである。

その4 「最後に」

出水市の報告書では、昭和46年の第四次調

査の時に、東北大学の芹沢長介教授のご参加が記録されているが、実は第一次の発掘にご参加下さり、T君と国分研二君の質問にもお答え下さったのだ。

先生方のご報告には、遺物の推定年代が数万年数千年何百年(誤差数十年)とあるので、その科学的な証明方法を教えて下さい！とお願いした。

先生は私達中学生にも分かり易く、丁寧にご説明下さった。炭の放射能解析である。遺物と同層の近くの炭化物をビニール袋に入れ、放射能解析すると、その減少率で年代推定が出来るとの事で、目からウロコだった。

また、出水工業高校二年生の瀬戸久夫さんも記録から洩れているが、本蔵久三先生の中学時代の教え子として参加、卒業後は千葉県の博物館長を務め上げ、令和の現在はインドネシアに在住しながら中近東を歩き回り、考

古学を満喫され続けていらつしやる。

上場発掘の頃、T君や国分研二君が土器や石器について生意気な程詳しくかったのは、この方のレクチャーを受けていたからである。

最近でもインドネシアから帰国の際は、一緒に乾杯するお付き合いである。

また、後輩の先達一男君は、20才過ぎの頃出水でフォークコンサートを開く程であった。

長渕剛風の曲を作っていたが、技術的には長渕以上で、曲間の語りも面白かったが、残念な事に才能溢れたまま夭折してしまった。

実は、今回恥知らずな思い出話を書き残そうと思ったのは、昨年の国分研二君の訃報である。上智大学を卒業して、東京で御活躍らしいと風の便りに聞いてはいたが、長く逢えずにいた事が悔やまれてならない。

あの頃は弁当を交換して食べ、毎日好きな女の子の話しを語り合っていたのだ。

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

完

(しらおがわ・たかひと)

出水市文化協会 理事
俳句結社『河鹿』同人

